

することができるという意識が形づくられてきた⁶⁹。もちろん、科学や技術の進展がなければ、現在のような社会にはなり得なかったのだが、このような考え方に疑問を呈したり、見直したりすることをせず、これまで無条件に受け入れてきた⁷⁰ことが環境問題などを引き起こす原因だったことは事実である。この世界観が私たちの生き方、生活の隅々に浸透しているため、自己存在の意義もまた機械論的に捉えようとして生き辛ささえもが生じているのが現実ではなかろうか。

今現在、私たちは様々な問題を抱えているが、大きく捉えれば「食べ物、健康、住居、精神、環境」⁷¹とすることができるだろう。これらのテーマは人間が生きる上で不可欠のものであり、それぞれにおいて個人や集団、地域や国家、国連などのアクターが様々な活動しながら解決を試みている。しかし、ほとんどの分野において解決の糸口は見えていないと言ってよいのではないか⁷²。

なぜならこれまでの資本主義及び機械論的世界観というシステム自体に根本的な問題があるにも関わらず、それに手を付けずに見てみぬふりをし、表面化している問題の火のみを消すことに躍起になっているからだ。表面化した火を消したところで根本に存在する火が消えていないのだから別の場所で火が出るのは当然である。

では、どうすればよいのか。これから私たちが必要とするのは、「どのような世界で私たちは生きたいのか？」という問いを私たち一人ひとりが持つことから始まるという強い意志だと考える⁷³。この問いの前提は、「人間は生きもので、自然の一部である」という生命論的世界観⁷⁴である。人間は本来、生きものとして他の生きものや自然との繋がりの中で生きている。そして、「私」という存在も「他者」との繋がりの中で生きている。このことを再度認識しなければならない。

ただ、自然、生きものとの繋がりを感じることは現代社会において非常に難しいと言わざ

⁶⁹ ガリレイやデカルトなどの科学の創立者らの思想の積み重ねによってこの世界観は形づくられてきた。この過程で、人間的に意味のあること、つまり美的感覚や感情、道德観などという人間の「心」に帰属する一切が科学から排除され、それらは個人的主観的なものとされた。詳しくは、大森荘蔵(1994)『知の構築とその呪縛』(筑摩書房)を参照。

⁷⁰ なぜなら、進歩は心地よく響き、便利さや物質的な豊かさなどを約束するように見えるから。核の平和利用もまた、これらを約束するものとして受け入れられたと言える。

⁷¹ 詳しくは、『第6回平和文明会議会議録』を参照。

⁷² 日本で言えば、食料自給率の問題、貧困・格差に関わる問題、放射性物質による汚染、被ばくなど挙げれば制限がない。さらに言えば、TPPが効力を発揮するようなことになれば、私たちの生活はさらなる困難に直面するだろう。例えば、モンサントなどの巨大多国籍企業の遺伝子組み換え作物(遺伝子組み換え作物についてはさまざまな健康被害を及ぼす可能性が研究で明らかにされている)が大量に輸入されることで日本の農業は壊滅の危機に瀕することになる。詳しくは、鈴木宣弘他(2013)『TPPで暮らしはどうなる?』(岩波書店)を参照。また、国際的な観点では、MDGsについて、1日1・25ドル未満で生活する人々の割合が減少しつつも、都市部と農村部での格差が拡大するなど、解決に向けて進展しているか疑問がある。

⁷³ 資本主義システムにおいては、便利さを追い求めること、お金をいかに集めることができるかが豊かさの一つの象徴であった。それは人々の欲望に合致し、受け入れられ、結果としてそれを目標にして人々は生きることができた。しかし、このような世界観、システムであったからこそ、自然を破壊してきた。

⁷⁴ 詳しくは、中村桂子(2013)『科学者が人間であること』(岩波書店)、『第6回平和文明会議会議録』を参照。

るを得ない。これほどまでに情報メディアが進んだ社会では、目で見て、耳で聞き、肌で触れるだけの自然であれば、映像などで簡単に置き換えが可能だからだ。しかし、ここで言う自然や生きものは、このような置き換え可能なものではなく、「われらをめぐる存在全体の関わり合い」としての自然や生きものを指している。つまり、互いに幸福に生きるために関わり合う自然である⁷⁵。米国の海洋生物学者のレイチェル・カーソンは、この繋がりを実感する感性を「センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目を見はる感性）」⁷⁶と呼び、「澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直観力」⁷⁷としている。しかしながら、このような感性は子どもから大人になる過程で鈍くなり、全く失ってしまう場合もあり⁷⁸、現代社会はそれが顕著に現れている状況にある。ただ、このような感覚は元々私たちの中に備わっていたのだから、それを再び思い出すことは可能である。カーソン女史も述べているように、「まわりにあるすべてのものに対する自身の感受性にみがきをかけ、しばらくつかっていなかった感覚の回路をひらくこと、つまり、目、耳、鼻、指先のつかいかたをもう一度学びなおす」⁷⁹ことで感性を思い出すのだ。例えば、ふと頭上に広がる夜空を見上げたとき、見過ごしていた美しさに目を開く一つの方法は、「もしこれが、今までに一度も見たことのないものだったら？ もしこれを二度と再びみることができないとしたら？」⁸⁰と自分自身に問いかけることから始まる。

②自然との繋がりを実感し、自らを問うことから始まる

自分で実感することと同時に求められることは、その実感から立ち現れた問いを自身を築き上げるための問いと化し深めていくことである。自然や生きものとの繋がりは生きるということと直結している。つまり、生きるということは、自身の死生をも含めて他者や自然との関わりに視点を置いて考えられるべきものとなる。「どう生きるか？」と問われたとき、「私は……」と「私」だけの問題として捉えるのではなく、私、他者、自然を大いなる繋がりとして受け止め得る世界観に立って「私が生きること」を捉え直せば、そのとき、目の前には子ども、孫、その先の世代との繋がり、さらには自然との繋がりが広がっていることが自覚されるであろう。それによって初めて私たちは「人間である」ということを知り、自然の一部である自己を体現することができるのだろう。これが他者と共有されることで、私たちの

⁷⁵ 具体的な取り組みとして、例えば農業は自然との繋がり、地域社会や他者との繋がりを醸成し、実感することができる。ここでは自然を支配するものではなく、「耕したり、育てたり、生活するために働きかける」ものと捉える。その中で他者との関わりをも醸成することができるのだ。詳しくは、『第6回平和文明会議会議録』を参照。

⁷⁶ レイチェル・カーソン(1996)『センス・オブ・ワンダー』(新潮社)。

⁷⁷ 詳しくは、レイチェル・カーソン前掲書を参照。

⁷⁸ 社会や他者と接する中で幻滅を感じる、自然との関わりから遠ざかる、人工的なものを好むなどの理由からこの感性が失われていく。

⁷⁹ レイチェル・カーソン前掲書、pp.28。

⁸⁰ レイチェル・カーソン前掲書、pp.28。

目指すべき目標を語り合うことが可能となる⁸¹。もちろん、このような過程には時間を必要とするだろう。しかしながら、このような問いを持つことでしか、機械論的世界観を脱し生命論的世界観を実現することは難しいのではないだろうか⁸²。

世界観とは「自然をどう見るか、そしてどう生活し行動するかを含んでワンセットになっているものである。そこには宗教、道徳、政治、性、教育、司法、儀式、習俗、スポーツ、と人間生活のあらゆる面が含まれている」⁸³のものである。つまり、「人間は生きものであり、自然の一部である」その視点からの文明を私たちは具体化していかなければならない⁸⁴。人間生活のあらゆる問題を具体的に解決していかなければならない⁸⁵のである。

すでにこのような実感を基調として暮らしたり、それを基本にした取り組みを行っている人々は多くいるだろう⁸⁶。例えば、日本は国土の約 7 割が森林に覆われている。自然があるということはそこに多くの生きものが暮らし、地域ごとに独自の生態系が営まれているといえる。そこで暮らす人々も何らかの形で自然との濃密な関係を育みながら、独自の文化、伝統を守って生きている。

昨今政府によって取り上げられている「地方創生」は結局のところ経済成長と人口増のためであり、「中心」と「周辺」の構造が前提となることには変わらない⁸⁷。なればこそ、「中心」が主導するような「地方創生」などではなく、「私たち生活者が考える世界観に基づいた社会の創生」を私たち自身の手で始めなければならない。これについては、日本国内に限らず、世界中にそのような意識を持つ仲間がいると考えられる⁸⁸。残された課題は、「生活者と

⁸¹ この目標は政府や統治者から示される目標の類ではない。私たちが自然や他者と関わり合う生活者として持つ目標である。この目標が共有されてはじめて、政府はそのあり方、行動が定められる。

⁸² そのような問いから出発することで、生きものが絶滅し、人々が貧困のうちに死んでいく中で、資本を蓄積すること、競争の中で勝利することの無意味さを実感し得る。

⁸³ 大森荘蔵前掲書、pp.13。

⁸⁴ ただし、この世界観が全てで、これだけが唯一と考えることは、この世界観に囚われることになる。常にこれでよいのかという問いを持ちながら（懐疑）生きることによって概念に執着することなく自由な発想を展開することができる。

⁸⁵ そもそも、現代の世界観・見方は、外から眺められた（観察された）生命には見事に適合するが、感じ、喜び、考えるなどの心のありようを説明・描写することはできない。しかし、心のありようの説明・描写を怠ってきた、見てこなかったために「食べ物、健康、住居、精神、環境」において問題が噴出してきたのだから、「人間は生きものであり、自然の一部である」を世界観とすることで心のありようの説明・描写に対峙する必要がある。

⁸⁶ 例えば、半農半 X などの生き方を実践している人々の中には人間は生きもので自然の一部だという基本を持っている人も少なくないのではないだろうか。さらには、都市部ではない地域に若者が戻りつつある。彼らもまた、都市部にはない自然と間近に接しながら、生き方を模索するのではないか。そこには経済成長に立脚しない意識があるはずだ。それを拾い上げ、大きな流れにする必要がある。

⁸⁷ 地方とはどこから見た地方だろうか。むしろ東京などの大都市から見たものであり、中心の成長の足かせとなっている地方を自らの利益になるようにこ入れして、都市の成長を促進しようという意識があるのではないか。「まち・ひと・しごと創生本部」という名称においても、最重要視しなければならない「ひと（人材育成など）」よりも先に「まち」が出てくることから、これまでに行ってきたハコモノ建設などと根本的には同じ手法が繰り返される恐れがある。結局のところ、官僚は自らの利害関係で動いていることに他ならない。詳しくは、片山善博、小田切徳美(2015)「真の「地方創生」とは何か」(『世界』No.869,2015年5月1日、岩波書店、pp.74-84)を参照。

⁸⁸ 例えば、ドイツ南西部の小さなまちシェーナウでは、チェルノブイリ原発事故をきっかけに子どもの未来を守

しての思いを共有し、繋がりをついに醸成するか」である。

③生活者の思いを繋げるためのネットワーク

そのような繋がりを形成する過程において、友人ならばまだしも、自分とは全く関係性のない他者とどのように関係を築くかが課題となるが⁸⁹、その点においてある一つの方法がすでに提示されている。それが「六次の隔たり」という社会ネットワーク理論である。これは、自分とは全く見知った仲でもなく、関係性もないと思われる他人であったとしても、大体 6 人程の友人を介すればその人にたどり着けるというものだ⁹⁰。例えば、あなたと友人は「人間は生きものであり、自然の一部である」という前提を共有しながら、別々の共同体に属しているとする。互いが属する共同体の中でその前提が共有されれば、その共同体に属するそれぞれが別の友人とそれを共有し、そしてまた別の友人と……という繋がり方を重ねていくことで、緩やかで大きな、世界観が共有されたネットワークを形成することができる。さらに、この世界観を基盤とした社会を形成するための重要なポジションにある人物との接点が現時点でなかったとしても、6 人程度の知人を介すればその人物に接触することが可能だ。このように考えると、困難と思われうる世界観の共有も現実的なものと感じられはしないだろうか。

私たちは小さなコミュニティなどの集団でなければ、価値観や意識を共有するのは難しいと考えがちであるが、実際には、大きなネットワークの中でも共通の価値観を共有し、行動しているのだ。

終わりに

世界観を形成し、それを現実の世界で実践する。これには非常に長い時間を要することは事実である。しかし、その過程には、ありのままの自然を感じ、驚嘆する楽しさがあり、それを他者と共有する喜びがある。子どもはこれを何も考えずにやってのけてしまうのだから、私たちは子どもに学ぶべきなのかもしれない。

ただし、100 年、200 年のスパンで考えてほしい。資本主義を延命し、強者が弱者から収

るため、子どもたちの親が立ち上がり、自然エネルギーの電力会社を設立・運営している。また、アウトドアブランドのパタゴニアは環境キャンペーン「レスポンシブル・エコノミー（健全な地域社会を可能とし、意義ある仕事を作り、地球が補充できるだけの資源を使う経済）」、環境保護活動などを通じ、責任ある企業としての道を模索している。このようにさまざまな市民、企業が本質的には同じ目標を有していることを忘れてはならない。

⁸⁹ 友人や家族であったとしても、実感に基づいた世界観を構築していくには何らかのしくみが必要なかもしれない。ただ、個人の気付き・実感から生まれるものを大切にすることになるため、友人同士、家族で集い、自然を感じられるような時間を必要とする。

⁹⁰ 詳しくは、ダンカン・ワッツ(2004)『スモールワールド・ネットワーク』(阪急コミュニケーションズ)及び大澤真幸(2008)『不可能性の時代』(岩波書店)を参照。

奪を繰り返す続ける社会と自然・生きものと共存しながらそれ自体に喜びを見出すことのできる社会とどちらがよいのだろうか。その選択は、私たち個人がまず行うものであり、それによってこそ、私たち生活者の思想と生活を基盤とした社会、国家が成り立つのではないだろうか⁹¹。

“核廃絶と世界平和”というテーマは、決して遠い将来のための幻想的なスローガンのテーマではない。そこには、この地球上に生きる人間としての最も基本的な「掟」としての意味すら込められている。

現代の科学をしてもなお神秘が深まるだけの広大深淵な宇宙に数多ある銀河のうちの、天の川銀河と呼ばれる **2000 億個～4000 億個**の恒星を含む銀河系の辺縁にあるとされる、太陽系に属する惑星・地球に住むわれら人間、そして数千万種といわれる生物種。この地球に生命が誕生して **38 億年**といわれるが、その間、営々として続けられた生命の進化は、人間（ホモサピエンス）という高等生命（知的生命体）にまで至った。

だが、その進化した人間という生命体は、ついに自らが住む太陽系の中心恒星である太陽で行われている「核融合反応」、つまり核力からエネルギーを取り出すことにまで手を染めた。しかし、人間は、地球という閉ざされた惑星系の、生物圏、人間圏⁹²でしか生きられないか弱き生命体である。そのか弱き生命体に宿る頭脳が地球上、いや太陽系、銀河系、宇宙に起こるあらゆる事象を理解し、自らの知見として活用することについては、その可能性を肯定するが、自ずとその限界は見えてくる。

“核廃絶と世界平和”という、ほぼ **60 年**前から言われ始めたこのフレーズは、実は、地球に暮らす人類にとって根底的に達成すべき現実的課題であり、知的進化を果たしたはずの現代人に与えられた、宇宙や銀河系や太陽系そしてこの地球からの畢生（ひっせい＝一生涯）の公案、問いかけではないかと考える。

人間には、生まれながらにしてすべての人に宇宙、銀河系、太陽系、地球という壮大にして緻密な前提が貼りついている。この壮大にして緻密な前提を「生命存続の前提」と考えれば、その前提の本質は、“有限”という厳しい「時間の掟」であること、“限界”という厳しい「範囲の掟」であることが垣間見えてくる。その時、“核廃絶と世界平和”はその有限と限

⁹¹ 「ひとつの思想体系が未来をつくりだした歴史など存在しない。近代革命が思想体系から発生したわけではなく、あるいは資本主義が思想にもとづいて登場したのではなかったように、歴史は人々のさまざまな動きの中から形成されていく」（内山節、「現代日本の閉塞をつきくずす「地方」の価値と力」、『世界』2015 年 5 月号）。〇〇主義や△△思想がないから次にどうしたらいいかわからないという事態は、思想体系が一人歩きしてしまった結果、それができないという幻想が生まれたことに起因するのだろう。今私たちがすべきことは、思想体系を生み出すのではなく、考え行動することなのではないか。近代化や資本主義、経済成長などという言葉がなかった時代、私たちは自然との関係の中で生活を実践し、その中で思想を育んできたのだから。

⁹² 詳しくは、松井孝典（2009）『宇宙誌』（岩波書店）を参照。

界を守る人類に与えられた基本的な「掟」であり、人類が編み出した自己保存のための究極の叡知でもある、と考える地平に立つことができる。

“核廃絶と世界平和”という課題は、人類史上、20 世紀の人類に初めて突きつけられた、人類の存続を左右する極めてシリアスな課題であるが、それは同時に、これからの地球に生きる人類への「生存のための絶対的“掟”」でもあることを、私たちは深く自覚し、この課題をしっかりと共有しなければならない。

アメリカ・メイン大学で天文学・物理学を教えるニール・F・カミンズ教授が、自著の序文で語った象徴的な言葉を本稿の結びとしたい。

「1944 年の後半、第二次世界大戦末期になっていたときでも、地球は非常に質量が大きくて回復力があるから、何百万キロもの爆弾をいくら投下してもだいじょうぶだろうと、人類はたかをくくっていた。その当時、そのことに心を痛めていた人々は、第二次世界大戦が終われば爆弾によってできた傷は癒され、生命は存続し続けるだろうと考えて心をなぐさめていた。文字どおりすべての人が、地球や資源や人間にかかわる能力を当然のこととと思っていた。天然資源の採取や工業や農業や廃棄物の投棄といった人間の活動が、地球にどのような結果をもたらすかについてほとんど考えていなかった。なんといっても、地球はきわめて大きく多様だから、わずか数十億のちっぽけな人類が広大な地表を走りまわっても、その衝撃を吸収できるに違いないと思っていたのだ。

1945 年の原子力の解放は、地球やそこにすむ生物とわれわれとの関係をがらりと変えてしまった。われわれは核ボタンを押すだけで、生命を支える地球の能力を変えるか、終わらせてしまうことができるようになった。核エネルギーの使用は、はっきりと地球を意識した最初の人類の活動としてわれわれの注目を引きつけることになったのだ。だが、そればかりではない。

1950 年代から 60 年代を通じて、われわれは地球上のさまざまな事象を変えてしまうような能力をもっていることがはっきり意識されるようになるにつれて、われわれと地球との結びつきはさらに変化した。事実、人類が地球をどれだけむしばんでいるかということを、いやというほど意識させられるようになってきたのである。水と空気はひどく汚染されており、空は飛行機によって危険なほど混雑し、道路には車があふれ、都市はなんの遠慮もなくむやみに拡大し、有毒物質が廃棄され、しかもその捨てられた場所すらも忘れられて、大地は露天掘りと森林伐採によって赤膚をさらしていた。汽船で大洋を航行する乗客は大陸から大陸までひろがる浮遊物をまのあたりにした。(中略)

地球の生命維持能力が人類の活動によって強いストレスにさらされていることがはっきりする。われわれは土と空気と水の化学的性質を変えている。伐採や有毒物質によって森

林を破壊している。多くの動植物の生息地を奪っている。われわれの生存とその他の多くの種の保存のために、われわれは地球をどれほど汚染しているかよく考えなければならない」。⁹³

⁹³ ニール・F・カミンズ (1999) 『もしも月がなかったら—ありえたかもしれない地球への 10 の旅』 (東京書籍、pp.19~20)。

【Annex. 新たな問い】

以下では、文明哲学研究所が平和文明会議開催に向けて行った提言構想、そして平和文明会議の中で行われた議論から抽出された新たな問いを明記する。これらは当研究所の様々な活動の中で今後検討されていくべきものであるが、同様に私たち一人ひとりが考え、日々の生活の中で行動すべきものであると考えられる。

1. 提言構想から紡ぎ出された新たな問い

第1回平和文明会議において、当研究所は5つの提言構想⁹⁴を提示したが、限られた時間の中で十分に議論を行うことができなかった部分もあった。そのため、今後の当研究所の活動の重点的な課題として以下のものを提言構想から挙げてみたい。

*地球は閉ざされた惑星でありながら、地域ごとに異なる独自の生態系が成り立ち、私たちもまたそれぞれの地域に根ざした独自の文化、社会を築いている。そこでは人種・文化・宗教など多様なものが存在する。その多様性を認識し、許容しながらもさらにその深淵にあるはずの人類共通の精神文化「良心」で結ばれた人類社会の構築が必要である。この「良心」とはいかなるものかを世界各地の人々との対話などを通して探りたい。また、人間の本質、根源を表現する芸術（真・善・美・聖）は人類共通の精神文化となり得るのか、というテーマも興味深い。

*私たち人類が存続していくためには、自然生態系との関わりを実感した上で健全な自然生態系の維持を第一義としなければならない。それが生命論的世界観の根幹を成すものとなるのであるが、そのような世界観、つまり、サステナビリティが担保された社会において営まれ得る人間性豊かな生活とはいかなるものであるか、をすでに行われているだろう取り組みなども参考にしながら具体化していきたい。

*原発の廃止（廃炉）及び核兵器の廃絶をどのように行うかの具体的な道筋の検討。第3回平和文明会議で議論されたように、日本においてはこの道筋を考える場合、日米関係を深く読み解き、新たな関係を築くための提案を行う必要がある。そのためのより多くの知見を集めるのと同時に、日本における世界的水準の原発廃炉の研究の可能性についても知見を集約したい。

*地球に負担をかけない方法で再生可能エネルギーを利用しなければならないが、そもそも今のようエネルギーを無限であるかのように使い続けることは不可能である。再生可能エネルギー自体の限界と太陽光パネル廃棄物処理の問題点などを吟味し、ドイツや日本各地で行われている再生可能エネルギーについての取り組みを参考に次世代のエネルギー構造を考察する必要

⁹⁴ 提言構想全文は『第1回平和文明会議会議録』を参照。

がある。

2. 議論の中から導き出された新たな問い

第1回から8回までの会議を通じて様々な議論が交わされた。以下ではその議論から導き出された新たな問いを挙げていく。

* 平和をどのように醸成していくか？ を今後さらに深く考察するにあたり、以下3つの論点を挙げてみたい。

○学問の再構築の必要

第4章で述べた通り、世界観は私たちの生活の隅々にまで浸透するものであるから、学問においても機械論的世界観がその隅々にまで浸透していると考えられる。つまり、核廃絶と世界平和を目指し、生命論的世界観に基づいた社会を構築していくためには、学問もまた生命論的世界観に基づいて再構築を行わねばならないだろう。そのための知見を持ち寄り、展開を考える必要がある。

○社会の意識変革

人種・文化・宗教などの多様性を実感し相互に認め合うことと共に、平和を人類共通の価値として共有していくことが重要である。それをどのように教育していくべきか。また、メディアなどを用いながらいかに人々に伝えていくか、その手法を探る。

○芸術の役割の創出と展開

芸術が人類共通の精神文化となり得るかという問いとも関係するであろうが、平和を醸成するにあたり、芸術はどのような部分で寄与することができるか。平和に寄与する芸術の概念とその展開方法を探る。

* 人間は生きもので、自然の一部という世界観を前提とした場合、どのような社会形態が可能か、その可能性を探る。地球は、たとえ人類が減びようともそこに存在し続けるであろう。つまり、地球の生態系の中で私たち人類が持続して生きていくための社会形態を模索する必要がある。半農半Xなど、すでに行われている生き方の工夫の中で見えるものを拾い上げ、社会形態の具体化を行う。また、教育、医療、芸術などの現場においてはどのような取り組みが可能か。

* どんなに小さな生きものであっても、自然の一部として生態系の中で何らかの役割を担っている。例えば、ミツバチは蜜を集める過程で植物の受粉の媒介の役割を果たす。では、人間は？ 田畑を耕し、木々を伐採する中でそこにある生態系と交わりそれを維持する役割を担ってきたのか。人間が生態系の中でどのような役割を担ってきたかを考察することで、私たちが生きもので自然の一部であるという実感を持つためのヒントが得られるのではないか。

＊他者との間で共感や気づきはいかに醸成され得るか？ 他者に対して自然を見、感じようと書いたところで共感を得られることは多くはない。ネットワークを形成していくために、いかなる方法、表現が有効であろうか。また、そのネットワークはどのようなものであり得るのか。

＊気候変動の問題、貧困の問題、原発廃止の問題、核兵器廃絶の問題などそれぞれの問題に対して分かれて議論しているが、それぞれの問題は繋がっており、根本的には同じ問題であるとも言える。問題ごとに分かれて個々の問題の対応だけでは大きな流れにならず、根本的な問題の解決にも至らない。それが、相互に交流・議論し共に活動していくことでより大きな流れになる可能性があるのではないか。交流を促進していくにはどのような行動、工夫が必要なのだろうか。

＊第4章で考察した世界観に基づく時、私たちの総意として核エネルギー（核兵器・原発）への依存からの脱却が必要となるが、それは日本が国家として日米関係を再考し、核の傘から脱退することを意味する⁹⁵。日本が米国に従属するのではなく——米国に守られなければ、安全保障は成立しないと考える一種の幻想自体を問う必要——、自分たちの安全は自分たちで非軍事的に保障するのだという立場を掲げなければならない。そのためには、国際的な立場も同時に明確化していく必要がある。そこで自衛隊を解散し、非武装組織「X」を創設、直接的援助・贈与を行うことで安全を保障する。

- ・「X」は、積極的中立主義に基づき、政治的な同盟関係や貿易、経済的な関係、イデオロギー的な価値観などから独立し、困っている人を助けるという立場。
- ・派遣相手国からの受け入れ同意が条件で、武力介入は行わない。
- ・国内外の貧困地帯、紛争地帯、災害地帯に自ら出向いて直接的な援助・贈与を行う。
- ・所属する隊員は、普段は医療機関や省庁、様々な現場で勤務しているが、必要となった際に部隊の一員としてその現場に赴く。⁹⁶

という性質を有する。

すでに NGO などの組織が上記のような内容で活動を行っているが、重要なのは軍隊を持たない国家が、中立の立場で援助を行うという点にある。対立しあう国家同士のどちらも同じく援助するため、紛争国にとっては「X」を攻撃する理由はない。「X」があることで他国からの信頼を受け⁹⁷、国土自体も安全を保つことが可能となる⁹⁸。さらには、このような部隊が各国に

⁹⁵ 日米関係の現状について、詳しくは『第3回平和文明会議会議録』、白井聡(2013)『永続敗戦論』（太田出版）を参照。

⁹⁶ 詳しくは、『第3回平和文明会議会議録』を参照。

⁹⁷ 和辻哲郎は、著書『倫理学』の中で、人間関係は信頼の根拠であると述べている。家庭内の身体関係、友人同士の信頼関係、集団の中、集団と集団の間であっても、結局は個人と個人の間でどれほどのコミュニケーションが取られているかによってその信頼の度合いが変わってくる。無償の援助・支援という点においては、人と人同士の関係の醸成がまず必要になってくる。そこから信頼関係が生まれ、相互に安心を感じる社会をつくりあげていく。逆に武力による関係、例えば安全保障上相互に守り合うという関係においては武力によって裏打ちされた

も創設されていくことで、武力による安全保障に基づかない国際的な協調関係を築くことに繋がると考えられる。これは第 3 回平和文明会議において大澤真幸氏から提案されたものだが、部隊「X」は、1 年や 5 年などの短いスパンでの利益ではなく、より長いスパンで国益主義を超えて私たちの社会に安心と幸福をもたらす非常に有効な発想である。この発想の実現に向けた考察を重ねていく必要がある。

*子どもはさまざまなものに驚きを覚え、生きものとの繋がりを実感することに長けているのであるから、大人の私たちが彼らから学ぶことは多いにあるだろう。本学「子ども芸術大学」の意義もそこにあると考える。彼らの感性を伸ばしながら、そこから私たちが学べるような仕組みをより充実させる。

関係であり、常に敵がいることを前提とした関係である。そこには必ず裏切られたら……という不安感を拭い去ることはできない関係がある。同盟の関係であつてもどちらにしろ、他よりも武力を保持しようという意識が生まれ、軍拡は止まらない。現在の各国の軍事費増大の背景にはこのような人間の関係性の一側面が少なからずある。

⁹⁸ 自衛隊はこれまで災害地や紛争国において武力を行使せず、援助を主眼においていたため、ある程度の信頼を得ることができた。これをさらに展開させるためには、一度解隊し、非武装の援助部隊として再構築する必要がある。しかし、現状は逆にアメリカに追従し、集団的安全保障などの法整備を行い、軍隊化する方向に向かいつつある。このままでは逆に周辺国との関係を悪化させ、軍事的なパワーバランスの基に軍拡に向かう恐れがある。それは私たちの求める世界なのだろうか。

【引用・参考文献一覧】

- 岩波書店編集部編（2013）『これからどうする—未来のつくり方』、岩波書店
- 内田樹、中沢新一、平川克美（2011）『大津波と原発』、朝日新聞出版社
- 内山節（2015）「現代日本の閉塞をつくくずす「地方」の価値と力」『世界』No.869,2015年5月1日.pp.85-95、岩波書店
- 大澤真幸（2008）『不可能性の時代』、岩波書店
- 大澤真幸（2012）『夢よりも深い覚醒へ—3・11後の哲学』、岩波書店
- 小沢節子（2011）『第五福竜丸から「3・11」へ—被爆者 大石又七の旅路』、岩波書店
- 大森荘蔵（1994）『知の構築とその呪縛』、筑摩書房
- 金子勝、橘木俊詔、武者陵司（2010）『グローバル資本主義と日本の選択』、岩波書店
- 片山善博、小田切徳美（2015）「真の「地方創生」とは何か」『世界』No.869,2015年5月1日.pp.74-84、岩波書店
- 小出裕章（2011）『原発はいらない』、幻冬舎
- 小出裕章（2011）『小出裕章が答える 原発と放射能』、河出書房新社
- 小出裕章（2011）『子どもたちに伝えたい 原発が許されない理由』、東邦出版
- 小出裕章（2012）『日本のエネルギー、これからどうすればいいの？』、平凡社
- 小出裕章（2015）「核廃絶への道程—福島原発事故後の地平に立って」『世界』No.869,2015年5月1日.pp.49-55、岩波書店
- 鈴木宣弘、天笠啓祐、山岡淳一郎、色平哲郎（2013）『TPPで暮らしはどうなる？』、岩波書店
- 白井聡（2013）『永続敗戦論』、太田出版
- ダンカン・ワッツ（2004）『スモールワールド・ネットワーク』、阪急コミュニケーションズ
- 中村桂子（2013）『科学者が人間であること』、岩波書店
- 新村出編（2011）『広辞苑 第六判』、岩波書店
- ニール・F・カミンズ（1999）『もしも月がなかったら—ありえたかもしれない地球への10の旅』、東京書籍
- 文明哲学研究所（2013～2015）『平和文明会議会議録（第1回～第8回）』、文明哲学研究所
- 松井孝典（2009）『宇宙誌』、岩波書店
- 水野和夫（2014）『資本主義の終焉と歴史の危機』、集英社
- 湯浅一郎（2014）『海・川・湖の放射能汚染』、緑風出版
- レイチェル・カーソン（1977）『われらをめぐる海』、早川書房
- レイチェル・カーソン（1996）『センス・オブ・ワンダー』、新潮社
- 和辻哲郎（2007）『倫理学（二）』、岩波書店

Web ページ

外務省（閲覧日：2015 年 4 月 13 日）

http://www.mofa.go.jp/mofaj/dns/ac_d/page24_000380.html

WWF Japan（閲覧日：2015 年 4 月 20 日）

http://www.wwf.or.jp/activities/resource/cat_activities.html

安全なエネルギー供給に関する倫理委員会、『ドイツのエネルギー転換—未来のための共同事業』報告書

（閲覧日：2015 年 4 月 27 日）

<http://www5.sdp.or.jp/policy/policy/energy/data/toshin02.pdf>

環境省『平成 25 年 環境・循環型社会・生物多様性白書』（閲覧日：2015 年 4 月 27 日）

<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h25/>

パタゴニア（閲覧日：2015 年 4 月 27 日）

<http://www.patagonia.com/jp/patagonia.go?assetid=67372>

TTP から日本の食と暮らし・いのちを守るネットワーク（閲覧日：2015 年 5 月 1 日）

<http://www.think-tpp.jp/what/index.html>

2015 年核不拡散条約（NPT）再検討会議第 2 回準備委員会 核兵器の人道的影響に関する共同声明

（閲覧日：2015 年 5 月 11 日）

https://npt2013.files.wordpress.com/2013/04/joint-statement_jp.pdf

JOHN F.KENNEDY（閲覧日：2015 年 5 月 15 日）

<http://www.webcitation.org/60hHsjas1>

WNA（世界原子力協会）,World Nuclear Power Reactors & Uranium Requirements

（閲覧日：2015 年 5 月 20 日）

<http://world-nuclear.org/info/facts-and-figures/world-nuclear-power-reactors-and-uranium-requirements/>

UNFPA（国連人口基金）東京事務所（閲覧日：2015 年 5 月 20 日）

<http://www.unfpa.or.jp/publications/index.php?eid=00033>

UNFPA（国連人口基金）、『世界人口白書 2014』（閲覧日：2015 年 5 月 20 日）

<http://www.unfpa.or.jp/cmsdesigner/data/entry/publications/publications.00042.00000005.pdf>

Federation of American Scientists, Status of World Nuclear Forces（閲覧日：2015 年 5 月 26 日）

<http://fas.org/issues/nuclear-weapons/status-world-nuclear-forces/>

United Nations Institute for Disarmament Research (UNIDIR).2012.Reducing Alert Rates of Nuclear

Weapons（閲覧日：2015 年 5 月 26 日）

<http://www.unidir.org/files/publications/pdfs/reducing-alert-rates-of-nuclear-weapons-400.pdf>

核廃絶と世界平和

——平和で人間性豊かな社会を——

JT 生命誌研究館館長

中村 桂子

1. はじめに

この会議で出された「人々の暮らしが平和で人間性豊かであるために」何が必要か、何をすればよいかという問いを素直に考えたい。

平和と人間性を求めるなら、科学技術文明、金融資本主義経済の中で権力と金力を求めての競争に明け暮れる現代社会に多くの問題点があることは明らかである。その象徴が、**2011年3月11日**に起きた東日本大震災の時の原子力発電所の事故を含めての被害への対処のありようである。いやそれ以上に象徴的なのは、以来これまでの**4年間**の「復興」のありようである。「復興」と括弧つきにしたのは、単なる復興ではなくよりよい社会を実現すると言いながら、被害に遭った一人一人を人間として見ているとは思えない対応ばかりで、復興に真剣に向き合っているとは思えないからである。

それを具体的に示す一例が、**2013年9月**の東京オリンピック招致だろう。招致の可能性を判断する場で、福島での原発事故の汚染水処理が問題になった時、安倍首相が「それはコントロール下にある」と事実とは異なることを語った。しかも、このようなお祭を東京で行なえば、東北の復興に大きなマイナスをもたらすことは明らかであるのに、多くの人々が招致を歓迎し、今も東京ではオリンピックへ向けてのバカバカしい大工事が日々行なわれている。

これが「平和で人間性豊かである暮らし」へ向けての行動とは程遠いことは、明らかである。ここから抜け出し、望ましい社会を作るにはどうしたらよいか。制度や技術のありようを考える必要があることは確かである。しかし、それ以前に、社会を構成する一人一人が「みんなの幸せ」を求め、「ほんとうの賢さ」をもつ人になることが求められる。みんなの幸せ、ほんとうの賢さという言葉は、東北地方の暮らしを見つめた宮沢賢治の作品に頻繁に登場するものであり、今ここから学ぶことは多い。

2. 「ほんとうの賢さ」を「みんなの幸せ」につなげる

東日本大震災の後、なぜか宮沢賢治を読み直したくなった。地震・津波・原発事故に対して今何をすべきかを語った人々の中で、東北の地に根を下ろして生きてきた農民、漁民が、まさにほんとうの賢さを見せてくれたからである。それに対して中央の政治家、官僚、科学技術者、経済学者、評論家などの言葉は、頭の上を通り過ぎるものばかりだった。

賢治を読み直して学んだことを、「セロ弾きのゴーシュ」を例に語りたい。ゴーシュは、町の活動写真館の楽団でセロを弾く係なのだが、音程もリズムもうまくとれず楽長に怒られて

ばかりいる。練習を終えて帰る先は森の水車小屋、そこでの一人暮らしだ。実は今回の読み直しで、家に帰ったゴーシュが必ず水をゴクゴク飲むことに気づいた。それからやおらセロを弾き始めると、ネコ、カッコウ、タヌキ、ネズミがやってきて、それぞれから音の暴力性や癒す力を知らされたり、音程やリズムの本質を教えられたりするのである。ここで語られるのは、自然の中にあるいのちの音である。町の活動写真館は、乾ききった現代社会の象徴であり、ゴーシュが帰宅後水を飲むのは現代社会を離れて自然の中へ入る儀式なのではないか。それあってこそいのちの音に触れることができるのではないか。これが今回気づいたことである。そして六日後の本番でのゴーシュの演奏は、聴衆はもちろん楽長や仲間をも惹きつけ、アンコールを求められる。乾いた世界の人の心を湿った自然の音がゆさぶったのだ。

これが「セロ弾きのゴーシュ」のメッセージである。自然の中にあるいのちの力でこの社会を動かそう。そこからの出発こそが「ほんとうの賢さ」を身につけ「みんなの幸せ」を生み出す方法である。賢治はこう考えていたのだと思う。そして今も東北の地で自然と向き合っている人々にはその力が受け継がれている。

3. 一人一人が自然に向き合う

ここから得られる答は、「一人一人が自然と向き合うところから始めよう」ということになる。たとえばエネルギーについても、まず、自然と向き合う決心をしてから太陽光利用を考えないと、このエネルギー源が分散型であるという本質を忘れメガソーラー施設を建設することになる。まず集中から分散へという意識と暮らしの転換とが不可欠である。それぞれの地域の自然をよく知りそれを生かした暮らしを組み立てるところから始めなければ、自然エネルギーの活用はできない。

自然と向き合う場合の基本は、「複雑さに耐える」ことである。正邪、善悪、好き嫌い、敵味方を簡単に決める二分法でなく、全体を見て、そこから答を探し出す知恵を磨くことである。面倒さをいとわないことである。

すばらしい解決が眼の前に転がっていることなどあり得ない。複雑さに耐えるところから賢さと幸せを探す方向に動きだせば、その先に平和で人間性豊かな暮らしが見えると信じている。

核廃絶と世界平和

——『文明の知恵』で『棄民』をつくらせない——

ドキュメンタリー写真家

大石芳野

初回の会議冒頭で発案提唱者である徳山詳直理事長の「核廃絶と世界平和のために」という深い思いを聞かせてもらい身が引き締まる思いがした。続いて座長の松本健一さんが「新しい文明の創造のために」を講演した。「近代文明」に言及し「人類は核エネルギーも含めた近代文明をどう乗り越え、新しい文明をつくっていけるか」と政治思想家の視点を込めながらメンバーに投げかけられた。その後、5回までメンバーの発言に的確な言葉を添えたりまとめたりしながら座長を務めたが、残念なことに胃癌のために急逝された。その直前には、理事長だった徳山詳直さんも他界され、2本の太い柱を失った感じが否めない。

「平和文明会議」を通して各専門家の深い研究発表を聴き討論を繰り返すなかで私も触発されてきた。遠い先にしか答えは無いかも知れないが、結局、「核」と「人類」は共存できないことを改めて認識させられた。東電福島第一原発の爆発事故によって、平和利用の名のもとに推進された「核」がいかに危険なものかを日本人はむろんのこと世界中が知ることになった。それだけに第2回の小出裕章さんの講演は興味深く、長年にわたる原子炉の研究家であるだけに反原発意識への揺るぎ無い発言に多くを教えられた。そして第4回の、福島で農業を営んでいたジャーナリストの秋山豊寛さんの「被災者・被ばく者」についての講演は実感がこもっていた。二人の論と実を重ねた主張は聴く側にとっては立体的でもあって大いに考えさせられるものだった。

「3・11」以降の福島へは私もたびたび足を運んでいるが、文明哲学研究所が主張する「核廃絶」がもっと以前に大々的な広がりを持って有識者や政治家たちを捉えていたら「世界平和のために」どれほどの効果をもたらしただろうかと思わずにはいられない。それでもやがて理想論は現実化していくに違いないと信じている。

事故から4年が過ぎたが、福島では12万人以上がいまだにふるさとを後にしたまま県内外で避難民としての日々を強いられたままだ。政府も東電もほとんどの地域で「除染は終わった」として帰還を推し進めているが、山や野原が多い地域で風が吹けば土も木の葉も舞い上がるから、放射性物質は「除染済み」の家々や田畑にも降り注ぐことになろう。それを最もよく知るのは地元の人たちだ。内心は「騙されはしない」と言っている。そして口々にこうも語る。

「年寄りに戻れるけれど、若いもんや子どもらはどうしたってまずいなー」

「あの世が近くなったこの歳になって、子や孫とめったに会えない、土もいじれない。こんな目に遭わされて、どんな悪いことをしたと言うのか……」

福島の人たちは使ってもいない東電の原発事故によって放射性物質の被害に遭ったことで土地を汚染で奪われ家族との離散に追い込まれた。国を挙げての原発に対する「安全神話」がそうさせたのではあるが、一方「文明」の矛盾はそこにこそ潜んでいる。「文明とは夜が明るいことだ」と、皆が灯りと利便を求めてひた走った。疑問や反対の声は「神」を冒瀆するかのごとくに耳をかさずに近代化を推進した。やがて格差と差別が生じた。お金さえ与えれば地元は容易だと言わんばかりの資金がどんどんと投じられた。その金額は原発設置のからくりで消費者の電気料金に上乗せさせられている。結果、原発立地の住民は以前に比べて生活が向上し、甘んじてしまう歳月となった。しかし、そこには何重にも絡んだ心の差別が肥大化したのも事実だ。

「核エネルギー」の魔法にかかって以来ほぼ半世紀、都会の私たちは明るい夜に生活の糧を追い求めた。それを近代「文明」と呼ぶのだろうか。否、正しくなかったと私たちは原発事故の被害に苦しむ人たちに突き付けられている。

事故から4年が過ぎたことで帰還はますます推進され、同時に補償金は打ち切られていく。村を形成する老若男女や子どもの不安を体制側は拭い去ることはできず、結局、戻るのは年配者だけなのか。それでは農業は営めないし頑張っても風評被害に苦しめられる。収入の道も閉ざされ、結局は「野垂れ死に」に追い込まれやしないかという不安に人々は悩まされている。

こうした実態を追究していくと「核エネルギー」に支えられた「文明」は人類の敵だということになりそう。私たちは今こそ、とりわけ福島の人たちを「棄民」にしないことが「文明の知恵」だと主張したい。そのために知恵を出し合い、深め、広めていく必要性に迫られているのではないかということを、お互いに真剣に考えたい。

追記・2014年8月、私は緊急入院して会議を欠席しましたが、研究発表の「いま何を観るべきか」のごく一部が会議録第6回の末巻に掲載されています。また、京都造形芸術大学及び東北芸術大学において「福島 FUKUSHIMA 土と生きる」写真展を開催しました。合わせて文明哲学研究所にお礼を申し上げます。

核廃絶と世界平和

——どうすれば人類は平和を達成することができるか——

ピース・プラットフォーム代表
スティーブン・リーパー

どうすれば人類は平和を達成することができるのか？ という問いに答えることは非常に難しく、簡単には答えることができない。実際に、これから述べる私の答えは、達成までの道のりが非常に険しい。しかし、これ以外の方法はないと思われる。

1. 問題の所在

平和の実現以上に難しいものはないことは周知の事実だ。私にとって、この世界には妻以上に愛する者は存在しない。しかし、たとえ愛する妻との間であってもけんかのような穏やかな状況下でのトラブルは存在する。私たち人類は、欲するものを貪欲に追い求めてきた。自らの欲望の達成に何らかの物事や他者が介入しようとするものなら、それに対して怒りを覚える。そのような怒りを覚えたとき、私たちは自身の都合に従わせるため、それ——人々、動植物、環境など——に変わるよう強制を試みる。しかし、強制を行った途端、私たちは平穏な状況、平和な状態にあるとは言えないことはお分かりだろう。

さらに悪いことに、私たちの多く——特に男性は——高い競争の原理を人類の歴史の中で植えつけられてきた。また、私たちは権力の階層構造を組織するよう遺伝子的にプログラムされているように思われるし、私たちのほとんどは、仕事や社会生活の中で出会う人々について自分自身よりも力を持っているか否かを即座に判断しながら生きている。

このような競争世界では、強い力を持つ者がいれば他の者は脇に退き、弱い力しか持たない者に対しては、人々はその人に退くよう求める。そして、強い者が誰かが分からない場合は、人々は戦い、強者を決める。時には視線で、言葉で戦い、殴り合いや武器を使うことで勝者を決めてきた。そして勝者を決めるため、人類は2度、核兵器を使用した。

核兵器を戦争で2度使用した1945年以降、核兵器は人類全体の生存を脅かすものとして、使われていない。しかし、地球に生きるほとんどの人々は、核兵器とは何か、それが使われることで何がもたらされるのかを全く知らないため、核兵器を廃絶するに至っていない。もしも多くの人々が核兵器について知ったならば、一部の競争主義的で好戦的な人々が全人類の生存に脅威を及ぼすような行い——つまりは、核兵器の保有、使用、それによる威嚇など——を許しはしないだろう。

そのため、核兵器の廃絶は実際には非常に簡単にできるとも言える。私たちのすべきことは、核兵器は私たち自身、次世代、次々世代を含む人類全体、さらには地球環境など、私た

ちが愛するあらゆるものに対して破滅的な脅威であることを全ての人々に知らせることだ。ここにおける困難は、メディア、つまり大衆教育が、核兵器によって莫大な利益を得続けたと考えている強力な力を持った人々によって支配されていることである。非常に少数の利己的で極めて危険な者たちによって、**50** 年以上もの間、私たちは絶滅の淵に立たされていると言える。

つまり、私たちが直面している問題の一つは、政治、経済、社会的なヒエラルキーの頂点にあって絶大な力を持つ人々が、私たちのような力を持たない者に関心を寄せていないそのこと自体である。実際、頂点に属するような人々は、自らの富と権力についての競争にかかりっきりで、そのため私たちの星を住めないようなものにしつつある。もしも彼らが止まらなければ、象が闘いの最中に草を踏みつけるように、彼らは私たちを、そして自らをも殺すことになるだろう。

なぜ私たちは**1%**の資産階級が行うこのような状況を許すのか？ なぜ**99%**を占める富を持たない数十億人は、世界をコントロールしている一部の大金持ちである企業の有力者によって使われ、虐待され、脅され、絶滅に怯えさせられるような状況を自ら許すのか？ なぜ私たちは彼らに私たちの世界をコントロールさせているのか？ 今、私たちは立ち上がり、彼らを私たち全体の意思に従わせるときにある。最小限の団結であってもこのようなことは可能だと思う。

「赤よりも死を」というスローガンがある。これは **1950** 年代及び **60** 年代の冷戦期の闘士が使ったもので、共産党員によって米国がコントロールされるくらいならば、核戦争を戦い、地球上の全ての人間を殺して自分たちも滅びたほうがましだという意味だ。このスローガンがあなたにとってバカげたものに聞こえるならば、あなたは権力のヒエラルキーの中で競争を繰り広げるような人間ではないだろう。真の闘士は敗北よりも死を選ぶ。そして、大部分において、真の闘士だけが権力のヒエラルキーの頂点に君臨することができる。

しかし、悪いことに私たち **99%**の一般市民は頂点に君臨する人間を崇拝する傾向にある。今日、一般の人々は権力、特に競争の原理を崇拝し、その競争における勝者を崇拝する。大企業の **CEO**、国家の王や大統領、富と名声を手にする役者、モデル、映画監督、スポーツ選手など、競い合い、勝者となった者ならば誰でも無条件に崇拝する傾向にある。そして、彼らが勝てば勝つほど、彼らに対する崇拝は強くなっていく。対して勝者もまた、崇拝されることを欲し、勝てば勝つほど、さらに勝ち続けたいという欲求が生まれる。例えば、世界で第**2**位のテニス選手、ボクシング選手、水泳選手は世界の頂点に君臨したいがために、持っている全ての時間、お金、思考、エネルギーを費やすのが常だ。

私たちが直面している問題の本質はここにある。私たちは、競争に勝利し、崇拝されるような闘士——競争は人生を惨めなものにし、競争の勝者は私たち全てを破滅へ導くことを理解しないような人々が崇拝するのだが——によってコントロールされ、暮らしが脅かされる世界に生きている。もし私たちが本当に核兵器の廃絶を望み、平和な世界を実現することを

望むのならば、何を崇拜するかということを変えていかなければならない。

2. 自分自身から始まる解決策

まず、権力に対する崇拜をやめることが重要だ。政治家や有名人に媚び諂うことをやめよう。上司にゴマをすることをやめよう。富を賛美するような雑誌を読んだり、テレビ番組を見ることをやめよう。貧しく、力のない人々の多くは金持ちや有名人に関する話題が載っている雑誌を読むのを好む。例えば、彼らはイタリアの素晴らしい私有地——この私有地は、彼が世界の主要都市近郊に所有する 7 つの家のうちの 1 つで、数百万ドルするものなのだが——にある 120 台の高級車ガレージで 77 台のロールスロイスと共に立つハンサムな貴公子を称賛する。

もしあなたがこの男性を称賛の目で見るとすれば、あなたも問題の一部を担っていると言えるだろう。しかし、現実を見てほしい。この地球上に住む 50% の人々は、自分の家にトイレさえない。50% は 1 日 200 円以下で生活している。毎日 2 万人の子どもたちが飢えや本来であれば治療可能な病気で死んでいる。この現実を直視すれば、高価な車や家を所有するハンサムな貴公子は、なんと無情で、欲深く、自己中心的な人物かと思わずにはいられない。本来であれば、彼が社会的責任を理解し、まともな感覚を備えるまで、彼は敬遠されるべきではないだろうか。

99% の一般市民に属する人々の多くは、美人であったりハンサムな有名人の実生活、いわゆるゴシップ記事を好んで読むことがある。例えば、彼らはとても華やかで王女様のような女性の前に裕福で力のある男たちが群れをなしている姿を好む。我らが王女は、ただ遊びのためだけに世界有数のサッカー選手と結婚する。その結婚生活はパリの有名なレストランで激しいけんかをするまでの間、1 年かそこら続く。彼との離婚の数週間後には、彼女をモデルにして、雑誌『ヴォーグ』の表紙にすると約束するような有名なファッションデザイナーと結婚する。かの王女様の最も懸念するところは、既に 2 度目の結婚式だということは明らかに関わらず、白いウェディングドレスを着るべきか否かなのだ。

この王女もまた甘やかされ、自己中心的で、未熟な子どもだと言えるし、彼女に熱を上げるような男たちは大ばか者だ。彼女もまた自分自身を愛する以上に他者を愛することを学ぶまで敬遠されるべきだろう。富や名声、美貌や逞しさなどによって称賛されたり尊敬されたり愛されるべきではない。何十億人もの人々が苦しんでいる中で、自らの贅沢のみを求めるために力行使するような有力者は軽蔑され、冷笑され、疎まれるべきなのだ。彼らのような愛のない力は危険なものであり、私たちの地球にはこのような人々を崇拜している余裕はすでにない。

そして、権力に対する崇拜をやめたならば、あなた自身の持つお金に対する崇拜もやめよう。あなたが働いている会社に対しての——特に会社の経営者に対しての——崇拜をやめよう。民間企業は私たちの地球にとって最も強い影響力を持ち、最も有害な存在だ。なぜなら、

企業は自身の存続、利益と成長だけを追い求めるものだから。彼らは私たちの土地も水も空気も汚染しながら、別の場所で安価な労働力を見つけるとすぐに土地を放棄する。企業は政治家を操り、自分たちにとって有利な法律をつくり、規制機関には賄賂を送り、選挙の際には人々を扇動して自らの利益になるような候補者に投票させる。彼らは国家よりも強大な力があるのだ。その力を削ぐ方法は彼らのために働くことをやめるしかない。

民間企業のために働くのか、それとも労働者が所有する会社のような組織で働くかを考えてみてはどうだろうか。もし会社の運営に対してあなたが口出しできないなら、もし会社の運営委員の任命にあなたが一票を投じることができないなら、そんな会社は辞めたほうがいい。お金のために嫌な仕事をするくらいなら、飢えたほうがましではないか。お金というものに関係なく、あなたの愛すること、あなたが正しいと思うことをしなさい。お金の縛られている限り、平和というものを知ることはできないし、平和なしには私たちの生存を脅かす地球規模の問題を解決することはできないのだから。

力とお金を崇拜することをやめたならば、全ての暴力を放棄しよう。もちろん、暴力の放棄は核兵器の放棄からはじまる。もし核に関する暴力を放棄できないならば、私たちは滅びる道しかない。核兵器の放棄のあとには、戦争の放棄——実際には、戦争は病気ではなく、ある症状なのだが——を行う。暴力の放棄は事実上勝者の放棄であるから、それは勝利という概念自体を放棄することになる。どこにも勝者も敗者もない状態をつくり出すことになる。

もしあなたが敗者のことを考えずに何らかの物事で勝利するならば、それは暴力を振るったことになる。もしあなたが何かを元々持っていた人のことを考慮せずに獲得すれば、それもまた暴力に当てはまる。もしあなたが言葉などによって誰かを傷つければ、それも暴力だ。

今私たちが生きている暴力的な競争の世界では、暴力の放棄は望みがなく、非現実的ではなかったものに見える。しかし、残念ながら、私には暴力の放棄以外に世界を平和なものにする方法が見つからない。私たちは何万年にもわたって暴力によって悪を滅ぼそうと試みてきた。しかし、その結果は悪の力をより強大にし、私たち自身の首を絞めている。悪の存在から暴力の力を取り除くためには、まず私たち自身が暴力を放棄することからはじめなければならないと思われる。

イラン、北朝鮮、パレスチナ、イスラエルやアメリカだけが平安な状況に転じたとしても、それは決して私たち全てが平和な状況に落ち着いたということではない。もし私たちが平和を享受したいがそれは正義が行われてからだと言え、私たちは決して正義も平和も享受できないだろう。平和への道はない。平和自体が道なのだから。そして、それは自分自身から始まる道だ。

私は死にたくない。でも殺されるよりは死んだほうがいい。魅力的な場所にある 7 つの豪華な邸宅を回れるような自家用飛行機が欲しいけれど、世界中の人々が苦しむことなく、生きるために必要なものを手に入れることができるのを見届けるまでは、私は自分自身が生き

るのに必要なもの以外は欲しない。間拔けな話に聞こえるかもしれないが、もし私たち皆がこのような心がけを実践したとすれば、私たちの地球はすぐにでも楽園になるだろう。しかしながら、現実問題として、実際にこのような行動を起こさなければ、2050年までには人類は滅びてしまう可能性が大いにあることを最後に指摘しておきたい。

World Peace and the Abolition of Nuclear Weapons

How can the human family achieve peace?

Steven Leeper

This is a difficult question, and I have no easy answer. In fact, my answer is extremely difficult, but I see no other.

1. The Problem

Nothing is more difficult than peace. There is no one in the world I love more than my wife, but I have trouble being peaceful even with her. We human beings are always trying to get what we want, and when something or someone gets in our way, we get angry. When we get angry, we try to force the people, animals, plants and things around us to bend to our will. As soon as we do that, we are no longer at peace.

To make matters worse, many of us, especially men, have been bred to be highly competitive. We are genetically programmed to organize ourselves into hierarchies of power, and most of us instantly know whether the person we are with has more or less power than we do.

In this competitive world, when someone with more power gets in our way, we step aside. When someone with less power gets in our way, we expect him to step aside, and when we are not sure who is stronger, we fight. Sometimes we fight with our eyes, sometimes with our mouths, sometimes with our fists, sometimes with our guns, and twice, we used nuclear weapons.

Since 1945, we have not used nuclear weapons because those weapons actually threaten our collective survival. We still have those weapons because the vast majority of people on our planet have no idea what they are or what they can do. If people knew, they would not allow a few highly competitive, aggressive men to threaten the entire human family.

Thus, getting rid of nuclear weapons is actually very easy. All we have to do is let everyone know the extent to which those weapons threaten them, their children, their grandchildren,

and every person, place or thing they love. The difficulty here is that the media, thus the power of mass education, is in the hands of the highly competitive, powerful people who want to continue making vast sums of money from nuclear weapons. A very few selfish, extremely dangerous men have kept us on the verge of total annihilation for over fifty years.

So one problem we face is certain people at the top of our political, economic and social hierarchies who have too much power and too little concern for those of us with less power. In fact, these people at the top are so focused on their competition for wealth and power that they are making our planet unlivable. When elephants fight, the grass is trampled. Our elephants are literally killing us, and they will kill us all, including themselves, if they are not stopped.

Why do we allow this? Why do the billions in the 99% allow ourselves to be used, abused, bullied, and threatened with extinction by the few super-rich corporate magnates that control our world? Why do we let them control our world? Why don't we rise up and force them to bend to our collective will? We could do so easily if we were even minimally united. Why don't we unite?

I am old enough to remember the slogan "better dead than red." This is what the warriors of the 1950s and 60s said to indicate they would rather fight a nuclear war and kill every human on Earth, including themselves, than let communists control the United States. If this sounds crazy to you, you are not the kind of competitive person who will make it to the top of a power hierarchy. True warriors would rather die than lose and, for the most part, only true warriors get to the top of power hierarchies.

But even worse, we 99%ers seem to worship the warriors who get to the top. Ordinary people today worship power and, especially, competition. We worship winners. The CEOs of large corporations, the kings or presidents of countries, rich and famous actors, singers, models, filmmakers, athletes, etc. We worship anyone who has competed and come out a winner. The more they win, the more we worship them. And winners love to be worshipped, so the more they win, the more they want to win. The second best tennis player or boxer or swimmer in the world spends all his time, money, thought and energy trying to become the best.

So this is the real problem. We live in a world controlled and threatened by warriors who are worshipped because they are winners by people who don't understand that competition is making their lives miserable, and the winners are leading us all to our doom. If we want to abolish nuclear weapons and achieve a peaceful world, we have to change what we worship.

2. The Solution

First, stop worshipping power. Stop fawning over politicians and celebrities. Stop sucking

up to your boss' boss. Stop reading magazines and watching TV shows that glorify wealth. A lot of poor, powerless people love to read magazines about the rich and famous. They admire the handsome prince with 77 Rolls Royces in his 120-car garage on his fabulous estate in Italy, which is just one of seven multi-million dollar homes he has near major cities around the world.

If you admire this guy, you are part of the problem. Fifty percent of the people on this planet have no toilet in their house. Fifty percent are trying to live on less than 200 yen a day. Over a billion are seriously malnourished. Twenty thousand children die every day from hunger or easily cured diseases. Given this reality, the handsome prince with all the cars and houses is a heartless, greedy, self-centered pig. There is nothing at all admirable about him. He should be shunned until he develops a decent sense of social responsibility.

Many 99%ers love to read about the sex lives of beautiful people. They love the princess who is so gorgeous she has rich and powerful men swarming at her feet. For fun, she marries the world's best soccer player. The marriage lasts a year or so, until they have a furious food fight in a famous restaurant in Paris. In a few weeks she marries a famous clothing designer who promises to make her a model and put her on the cover of Vogue. The thing our princess is most worried about is whether to wear white at her second wedding since it is clear by now that she is not a virgin.

This princess is a spoiled, selfish, immature brat. Any man who gets involved with her is an idiot. She, too, should be shunned until she learns to love someone other than herself. No one should be admired, respected, or loved because they are rich or famous or beautiful or powerful in any way. Any powerful person who uses his or her power to demand the extravagances of life while billions suffer should be scorned, ridiculed and avoided. Power without love is dangerous, and our planet can no longer afford to worship such people.

After you have stopped worshipping power, stop worshipping money. Here I'm talking about your own money. Stop worshipping the company you work for and, especially, the managers at the top of that company. Corporations are the most powerful, most dangerous entities on our planet. Corporations care about nothing but survival, profit and growth. They poison our land, water, and air, then abandon our communities as soon as they find cheaper labor somewhere else. They control our politicians, they write our laws, they bribe regulatory agencies, they tell people who to vote for, they are more powerful than countries, and there is only one way to take away their power – stop working for them.

Work only for co-ops or some other form of worker-owned enterprise. If you have no voice in the management of your company, if there are no workers that you can vote for on the top management board of your company, then quit. Do not work for money at a job you hate. It's

better to starve. Do what you love and know is right for you, regardless of the money involved. As long as we are controlled by money, we will never know peace, and without peace, we will not be able to solve the global problems that threaten our survival.

After you have stopped worshipping power and money, reject violence—all violence. Rejecting violence starts, of course, with rejecting nuclear weapons. If we can't even reject nuclear violence, we are doomed. After nuclear weapons, we have to reject war, but war is a symptom, not the disease. Rejecting violence actually means rejecting winners. It means rejecting winning itself.

If you win something without caring about the loser, you are being violent. If you take something without caring about the person you take it from, you are being violent. If you hurt anyone in any way, including with your words, you are being violent.

In the violently competitive world we now live in, rejecting violence seems hopeless, Quixotic, and stupid. Unfortunately, I can see no other way to make the world peaceful. We have spent tens of thousands of years attempting to eliminate evil through violence, and all we have done is make evil so powerful it's about to take us right off this planet. To take the power of violence away from evil, we have to abandon it ourselves.

If we say we want to be peaceful, but only if the Iranians or North Koreans or Palestinians or Israelis or Americans become peaceful, we will never be peaceful. If we say we want to be peaceful but only after we achieve justice, we will never have either justice or peace. There is no way to peace, peace is the way, and that can only start with me.

I don't want to die, but I'd rather die than kill. I'd like to have a private jet flying me around to my seven spectacular homes in exotic locations, but I refuse to take more than I absolutely need until I can see that everyone else is being well cared for and has what they need. Perhaps these commitments make me an idiot, but if we all commit ourselves in this way, our Earth will soon be a paradise. More urgently, if we don't make these commitments, our Earth will free itself of human life by 2050.

核廃絶と世界平和

——どうすれば人類に平和がもたらされるか——

フォトジャーナリスト

豊崎博光

ウランの採掘、精錬、濃縮に始まる核兵器の製造と実験、核燃料の製造と原子炉の運転、使用済み核燃料の再処理、核廃棄物の処分に至る“核兵器・核燃料製造の流れ”の全ての工程が、人々の安全と世界の平和を脅かしている。アメリカ、ソ連（現ロシア）、イギリス、フランスと中国の5カ国が行った2千回以上の核実験とりわけ5百回以上の大気圏内核実験の放射性降下物、使用済み核燃料再処理工場など核施設の事故やチェルノブイリ原発事故、東京電力福島第一原発事故などで放出された放射能によって地球全体が被ばくし、人類の生存が危うくされている。

これに加えて、2014年時点で世界に存在する約1万6千発の核兵器のうち爆発威力の小さい核兵器を使った戦争が起きた場合、異常気象が発生し、トウモロコシや小麦、コメなどの収穫が激減して世界で約20億人の人々が飢えにさいなまれると推測されている（2013年、「核戦争防止国際医師の会」報告）。また、31カ国にある437基の発電用原子炉（原発）のうち1基が事故を起こして大量の放射能を放出した場合、ヨーロッパでは約2800万人が、南アジアでは約3400万人の人々が高レベルの放射線で被ばくすると見積もられている（2012年、ドイツ「マックスプランク化学研究所」報告）。

核兵器と原発の存在が人間の安全と生存、世界の平和を脅かしている今、核兵器と原発の両方の「核」の廃絶が急がれている。

原発は、核燃料として濃縮度が4%から5%のウランが使われるが、20%以上の高濃縮することで、また、燃やした後の使用済み核燃料に生みだされるプルトニウムを取り出すことで核兵器の製造が可能となる。このように、原発が核兵器製造手段のひとつとなっていることから原子力エネルギー依存からの脱却が核兵器製造への道を閉ざすことに繋がる。

原子力発電に頼らない暮らし方としては、一軒の家、一棟の共同住宅、小さなコミュニティという単位で使うエネルギー、例えばソーラーや水力、風力、バイオマスなどの再生可能、持続可能なエネルギーを複合的かつ効率的に使う方法がある。すなわち、エネルギー源をこれまでのメガからミニ・サイズにすることである。この暮らし方は、家や共同住宅の造作、建て方などの工夫に始まり新たな地域づくり、都市への人口などの集中ではなく地域の自立につながってゆく。地域の自立の確立は他者のものを奪わず分け合う暮らしとなり、平和の構築、維持に繋がる。

人類の安全と生存、平和を危うくしている核兵器については、都市や地域の非核化の拡大が廃絶への道のひとつとなる。事例として、**1980**年に米ソ中距離核ミサイルの配備で核戦争が眼前に迫った時、イギリスのマンチェスター市が市内に核兵器の貯蔵、配備を禁ずる非核宣言を発した。都市の非核宣言は日本を含む世界に広がり、国家の非核化を促し、ミクロネシア連邦憲法が前文に、パラオ共和国憲法に非核条項が入れられ、南太平洋のバヌアツ、ニュージーランドやモンゴルが非核国家を宣言した。都市、国家の非核化は地域の非核化に繋がり、**1968**年に「ラテン・アメリカ及びカリブ地域における核兵器禁止条約」が、**1986**年に「南太平洋非核地帯条約」が、**1997**年に「東南アジア非核兵器地帯条約」が発効するに至った。これら**3**つの非核兵器地帯条約が南極条約（**1961**年）、宇宙条約（**1967**年）、海底非核化条約（**1972**年）と相互に作用することで地球の相当な部分で核兵器の貯蔵、配備、使用または使用の威嚇が禁じられることになった。非核国家の中には、核動力艦船と核兵器搭載能力のある艦船や航空機の領海、領空の通過を禁じているところもある。

都市、国家、広大な地域の非核化によって核兵器の移動、配備、貯蔵などを禁止することは核兵器を“無力化”することになり、持つことの意味をなくすため核兵器廃絶の有効な手段、世界平和の構築に繋がる。

核兵器製造の手段となる原子力発電への依存からの脱却、核兵器の無力化は、核開発の始まりのウランの採掘と精錬、濃縮の停止となり「核」のない平和な世界を築くことになる。「核」のない平和な世界を早急に築くと共にこれまでの“核兵器・核燃料製造の流れ”の全ての工程で被害を受けた人々の人権の回復と十分な補償、大地や水などの環境の復興を始めなければならない。